

国文学全史

1

平安朝篇

藤岡作太郎
秋山虔他校注

東洋文庫
198

平凡社

国文学全史

1 平安朝篇

藤岡作太郎
秋山虔他校注

あきやま けん

秋山 虔 大正13年岡山県生。東京大学文学部卒(昭22)。東京大学教授。専攻 日本古代文学。主要著書『源氏物語の世界』(東京大学出版会)、『王朝女流文学の形成』(塙書房)、『紫式部日記』(岩波書店)など。現住所 東京都板橋区赤塚 5-25-6

しのはらしやうじ

篠原昭二 昭和7年愛媛県生。東京大学文学部卒(昭34)。東京大学助教授。専攻 日本古代文学。主要論文「大君の周辺」(『国語と国文学』昭40・9)、「類聚本江談抄の編纂資料について」(『中世文学の研究と資料』東京大学出版会)など。

こさちやてゐひこ

小町谷照彦 昭和11年長野県生。東京大学文学部卒(昭35)。東京学芸大学講師。専攻 日本古代文学。主要論文「拾遺集時代の和歌」(『国語と国文学』昭39・7)、「三代集の名所歌枕」(『常葉女子短大紀要』1 昭43・11)など。

国文学全史 平安朝篇1 [全2巻]

東洋文庫 198

昭和46年11月25日 初版発行

検 印

校注者代表 秋 山 虔

省 略

東京都千代田区四番町4番地

発行者 下 中 邦 彦

発行所

郵便番号 102 東京都千代田区四番町4番地

振替・東京29639 株式会社 平凡社

落丁・乱丁本はお
取替いたします

印刷 株式会社 共立社印刷所
製本 株式会社 石津製本所

© 株式会社 平凡社 1971

0191-801980-7600

凡 例

本書は、藤岡作太郎著『国文学全史平安朝篇』（東京開成館 明治三十八年刊、岩波書店 大正十二年刊）を新たに校訂し、補注を加え、二冊に分割したものである。

その校訂および補注の方針を左に示す。

- 一 原文は現代仮名づかいに改めた。ただし、引用された古典の本文は、旧仮名づかいのままとした。
- 一 また引用が漢文の場合は、書き下し文を付した。
- 一 原文中に用いられている漢字のうち、当用漢字のあるものは、それに改めた。
- 一 原文中に用いられている漢字には、まゝ、片仮名の振仮名が施されているが、外国語の振仮名（たとえば、文芸復興^{ルネイッサンス}）以外は、すべて平仮名に改めた。また原文には振仮名のない漢字も、読者の便を考慮して、できるだけ多く振仮名を施した。ただし、基督教、希臘、羅馬などのごときは、片仮名表記に改めた。なお、原文における表記上の不統一はそのままとした。
- 一 原文中の誤植は、原著に付されている正誤表によって訂正したが、なお残置されている誤植と思しき文字、句読点等については、校注者の判断によって、これを訂正したが、その際、改造文庫版を参照した。
- 一 原文中に施されている強調の意味の。。。傍点は、、、、傍点に改めた。
- 一 原文中に「」をもって補つてある部分は原注であり、（）で補つたものは校注者による補注である。

る。

一 原文は紀元年号を用いてあるが、これはすべて西曆に改めた。

一 原文の各章ごとに付した補注は、原著の刊行の時期以降、現今までの研究の進展の状況を概略整理したものである。従つて、読者は原著を起点とする平安朝文学研究史の概況を把握することによつて現在の研究の方向を察知しうるのであらう。ただし、この補注は、原著に立てられた問題に規制されるまとめであることを旨としたので、主として基礎的な研究領域に限定し、評論的な研究領域については省略するか、あるいは最少限度におさえた。なお、重要な研究論著であつても、そのすべてを紹介することは不可能なので、それを参照することによつて研究動向を知りうる論著を、なるべく掲出するよう配慮した。総じてあくまで原著の説述の参考資料の提供であることをおことわりしておきたいのである。なお「総論」の部に限つて、文学の環境としての平安時代史に関する研究文献（単行本）を列挙するにとどめた。

一 本書の分担は左記のごとくであるが、全体の統一は秋山虔が行なつた。

秋山虔（総論・解説）、篠原昭二（第一期―第一・二・三・四・五・八・九章、第二期―第四・七・八・九・十・十一章、第三期―第一・二・七・八・九・十・十一・十二・十三・十四章、第四期―第一・二・三・四・五・六章）、小町谷照彦（第一期―第六・七章、第二期―第一・二・三・四・五・六章、第三期―第三・四・五・六・十五章、第四期―第七・八・九・十・十一・十二章）

緒 言

一、本篇は、わが企画せる国文学全史の一部をなすもの、成るに従うて、まずこれを公にす。前途遼遠、全部の成るはいまだいずれの日にあるかを知らず。こいねがわくは世の学者諸君が研究の結果の続発表せられて、世を裨益せんことを。微軀いささかまた驥尾に附して奮励せん。

二、本篇は、数年前、文科大学において講じたる国文学史をもととして、これを簡明に叙し、更に一二節を加えたるものなり。夏冬の休暇毎に、逗子に、能州和倉に、豆州伊東に、材料を携えゆきて筆を執り、最後に大磯にて総論を綴りそえぬ。人こそ知らね、この書を繙くにつけて、われには別太過ぎ去りし客寓の追懷の忘れ難きものあり。

一、文明史の一部として本篇を見るもの、或いは書籍の解題などの煩雜なるを非難せん。然りといえども、わが国、文芸の研鑽日いまだ浅く、古名著の定本も成らず、その時代も決せざるもの少なからず、これを以て文学史を説くに当りてや、まずその材料の価値を考查する必要あり。この書において、たとい他はこれを煩雜なりとすとも、われはむしろ省略に過ぎたりとせん。かつてわが近世絵画史を公行するに当りて、その緒言の第二条に述べたることは、更にここに繰り返さざるべからず。一、本篇の説くところ、文壇の大勢力たりし作家と作物とを主として、その他は節約に従う。神楽歌、催馬楽歌また和歌六帖の如きは、著名なるものなれども、文運の大勢に関係少なしと思えば、すべてこれを闕きたり。

一、夜半の寢覚物語は世に殆どその本なきを、中村秋香、黒川真道兩氏にその秘本を借覽することを得て、發明するところ少なからず。特に記して兩氏に謝意を表す。

一、西行を論ずるや、撰集抄はこれを取らず、もっぱら山家集による。山家集は流布本を用いざるを得ざりしが、近頃に至りて異本を得たり。されど稿本すでにわが手にあらずして、また訂正することあたわず。

一、索引はおおよそ現今の發音に従う。人名、書名共に平安朝のもののみを取り、その以前もしくは以後のものは須要のものといえども、煩を厭いといてこれを省く。ただし藤原定家のごときは、むしろ鎌倉時代の人なるべしといえども、その前半生はまた平安朝にあれば、その名もその編述の書もこれを加う。

一、六歌仙、梨壺の五人の類は、人名索引のうちに加え、和歌所、尚齒会の類は、件名として書名にあわせて索引を作る。

一、索引のうち、天喜四年六月殿上詩合などは詩合の条を見るべく、在民部卿歌合などは歌合の条を見るべく、太郎百首などは百首の条を見るべし。

明治三十八年九月

著者しるす

目次

凡例
緒言

総論

第一章	上古と近世	三
第二章	平安城	一〇
第三章	平安朝の社会	一六
第四章	日常の生活	二七
第五章	仏教の流布	三三
第六章	情念偏重の時代	四〇
第七章	時期の区劃	五〇
第一期	弘仁前後	
第一章	遣使留学とわが学問	六七

第二章	歴史制度等に関する著述および詩集	七
第三章	遊楽の風と漢文学の感化	八
第四章	弘仁前後の詩人——空海と小野篁	九
第五章	貞観より寛平までの詩人——都良香と菅原道真	九
第六章	貞観より寛平までの歌人(上)——在原業平	一〇
第七章	貞観より寛平までの歌人(下)——遍昭、小町等	一三
第八章	竹取物語	一三
第九章	伊勢物語	一五

第二期 延喜天曆

第一章	古今和歌集	一七
第二章	文章家としての紀貫之	一八
第三章	古今集の撰者	二〇
第四章	天曆時代の漢文学と詩合、歌合	二三
第五章	後撰和歌集	二七
第六章	後撰集時代の歌人	二九
第七章	大和物語	三六
第八章	蜻蛉日記	三八

第九章	宇津保物語(一)——その梗概……………	二九六
第十章	宇津保物語(二)——その評論……………	三七
第十一章	落窪物語……………	三四
解	説(秋山虔)……………	三三

国^{こく}

文^{ぶん}

学^{がく}

全^{ぜん}

史^し

平^{へい}

安^{あん}

朝^{ちよう}

篇^{へん}

1

小^こ篠^{しの}秋^{あき}藤^{ふじ}
町^{まち}原^{はら}山^{やま}岡^{おか}
谷^や

昭^{しやう}作^{さく}
二^に虔^{けん}
彦^{ひこ}太^た

校
注

郎^{ろう}

総論

第一章 上古と近世

われら何の幸か、この昭代に遇いて、千古未曾有の大戦を見、みずから戦勝国の民と誇ることを得るや。二十世紀の歴史の第一章は日本の勃興を以て始まる。その急速なる飛躍は東西古今にその比を見ず、まして黒船に驚き、オロシヤに慄えしわが祖先が、夢にだも想うこと能わざるところなりき。弘安の元寇、ただ颶風の倖せしのみ、文祿の征韓、寸功もなくして果てぬ、これらの小戦鬪を以て国史の最大事件とせし祖先は、誰か、今日、茫々たる満州に数十万の大兵を動かし、偉大なる万里遠征の敵艦を日本海上に塵にすることを測り得たる。わが国民は小説よりも大なる物語を實現せり。欧米各国はいずれも瞳若くとして、或いは驚歎の眼を睜り、或いは猜忌の色を浮べて、絶東の新進国を見、われはみずからまた意外の成功に、その天佑か人力かを疑わざるを得ず。しかしてこれが結果を見て原因を求むるもの、内外ともにその研究に怠らざるが、わけて外人は異種異俗の国民に対する好奇の念に促がされて、その戦勝の真因を考覈せんとするや切なり。

武士道、この一語を以て、日本国民の大飛躍を闡明する鎖鑰とす。或いは米食を以て、或いは水を呑むこと多きを以て、或いは頻繁なる沐浴を以て、優勝の原因なりとするものあれども、これらは穿鑿に過

ぎて滑稽に陥るの感なくんばあらず。十目の見るところ、古来の武士道実にわが国民を不撓不屈の勇士たらしめしなり。「背に矢を立つることなかれ」の諺も、矢と弾丸との差あるのみ、その諺の生命あるは今も昔に異ならず。妻を離別して戦場に出づるは、軍談講釈の上ならで、新聞雑誌に現にこれあり。一身を以て大君に捧げ、将卒相和し、同僚相勵まし、忍耐刻苦争うて難に赴き、死に就く帰るがごとし。これ古来わが国民が事に當って遵奉せしところにして、今日の大捷もまたこの精神より得たるものに外ならず。西洋人はキリスト教を以てその生涯の行為を律する根本の準繩とす。日本人のうちにこれに當るものを求むれば、儒教にあらず、仏道にあらず、また神道にもあらずして、武士道なり。武士道はわが国民思想の精髓なり。

武士道は日本国民の宗教なり、道德なり。極東帝国を論じて、その性質風俗を説明するものは、まずこの根本思想より演繹し来り、古来の歴史を批評するにも、これを以て標準とす。上下いづれも武を重んじて文を軽んじ、剣法兵術の發達せる割には、学問文芸の称するに足るものなし、哲学の研究、理化学の發明において何等の貢獻がある、士氣を練り、嚴格を尚び、君命じ士従い、各々その分に安んじて、粗衣糲食以て足れりとす、金錢を見ること塵埃の如くせよ、婦人と小人とは近づくべからず、かくの如きは、これ日本国民固有の性質なりと。然り、武士道の今日における効果は甚だ大なり。その社会に磅礴するや、日月も為に光を失うべく、千練万磨、光芒陸離たる日本刀が触れて斬らざるものなきが如くなるは、明白なる事実なり。然れどもただこの一武士道を以て、わが国民の特色を網羅し得たりとすべきか。これを以てすべて上下三千載の歴史を説明し得べしとなすか。

わが国の文芸を評するもの、多くは論じて曰く、日本人は色彩の限なし、その絵画は、空氣を画かず、

陰影を示さざるはもとより、森羅万象^{しんらばんしやう}ただその輪廓を引きて、真の色を写さず、線あつて色なく、平面あつて立体なきもの、これその特色なり。人物を描きても、よくその感情を表わすこと能わず、元來、わが国民は意志の權威を重んじて、克己制慾に力む、喜怒色に現わさず、苦樂の外に立つを以て、男子の面目とす。従うて日常の對話に接また抑揚波瀾^{はらん}なく、外人より見れば、平板にして沈鬱に過ぐるの感なきを得ず。この国民の画くところなれば、感情の表現に拙にして、変化に乏しきこと、当然の数なり。文学においてもまた然り、事實の変化を重んずること、絵画の輪廓の如く、心理の描写を怠るは、かの色彩に似たり。普遍性をのみ描いて、固有性を写さず、人間個々の性格の紙上に躍動することなければ、時に臨みて感情の区々なるに注意せず。これわが文芸の特色なりと。然り、色彩なく、感情なきが如きは、わが文学および美術における第一の欠点なること疑なし。しかれどもこれ果して頭髮の黒く、皮膚の黄なるが如く、わが国民に免るべからざる特色なるか。悠々たるわが文芸の歴史は、毫もその外に逸すること能わざりしか。

西洋の文学を学ぶもの皆いわく、その一応の意義はもとより通曉^{つうぎょう}すべし、趣旨の奥に洞徹するは、万里隔絶の異人種には、到底超えがたき難関なりと。言語はよく人の思想を表わすものなりといえども、なお聞くものの異なるだけ、その理会せる意義に相違を生ず、況や国語の全く異なる人々の間におけるをや。小説を読みて、その中に写せる服装風俗の、いかほどに驕慢なるか、また謙退なるかは解し易からず。詩を誦しても、その調律の真の妙味は得て感じがたし。たといかの国に往きて、久しくその社会に交わりたりとも、数年の研究はなお数年の研究に留まるのみ、生れながらの国民に比して、その文学を理會し玩味する能力の遙かに劣れるは論なし。得意げに批評するものの、滑稽を真面目に解し、卑俗

を優雅と謬る類も少なからざるなり。かくの如き陥り易き誤解は、ただ東西国を異にする文学の間にのみ見るべきものなるか、国は同じといえども、古今時を異にする場合にも起らざるか。言語思想は処によつて異なるのみならず、時によりてまた変ず。さらばこの相違によつて生ずる謬見は、処において然るが如く、また時によつて然らざるか。

江戸幕府時代の批評家が平安朝の文学を見るや、多くは曰く、惜しいかな、描くところ驕奢にして輕靡、かの伊勢、源氏の主人公の如き、姦嬌を事として憚からず、著者またこれに同情を寄す、代々の撰集、人々の家集また情語艷詞に充つ、かくの如くして風教を如何と、道德家流は弾指して顧みず。強いて弁ずるものは、これまた仏家の善巧方便、表は感興の鏡からんことを主として、裏には深邃なる寓意ありとす。或いは源氏を以て老莊の教えを敷衍したりとし、或いは和歌もまた道に入る媒なりとす。甲論乙駁、伊勢を以て生涯の憤懣を楮余に漏らししなりとし、或いは和歌もまた道に入る媒なりとす。甲論乙駁、様々の見解を下すものありといえども、いずれも己を以て他を測るものにして、江戸時代の色眼鏡を透して遠く平安朝を観察す。かの文学の真義は得べからずして、却つて後世附加の着色に妨げらるるも、また止むを得ざることなり。今日、文運隆々として揚り、古代文学の闡明せられたること、数十年前の比にあらず、研究の方法は自由にして周密に、よく従来の弊習を脱し得たりといえども、なお翻えりて思えば、今日のわが学問文学はなお江戸時代の余慶を被るもの多く、われらが考覈の基礎はかの時代に置かれざるを得ず。従うてわれわれが思うところ説くところ、前代の旧套を脱せざるもの多し。西洋文学およびその研究法を学べるものは、わが古代文学に通曉せず、古代文学に通曉するものも、またみづから古代の人となりて観察せず、かくして平安朝の文学も、これが真相を解するものは、極めて稀なり。

明治の今日はしばらく措いて論ぜず、紀元以来の歴史を探りて、文学の最も隆盛なる時代を討ねれば、直ちに指を平安朝と江戸時代とに屈せざるを得ず。平安朝といいても殆ど四百年の長日月、江戸時代もまた三百年に近く、その間、榮枯盛衰の運あるを免れずといえども、大体の運と特色とにおいて相似たるものあり。これを欧州の歴史に比すれば、わが奈良、平安は彼のギリシャ、ローマ、即ち上古時代なり、江戸時代は文芸復興以後の近世なり。仏教渡来以前の文学はいうに足らず、その後、奈良朝には、万葉集ありといえども、その外には特に見るべきものなく、文質彬彬たるはひとり平安朝を推さざるべからず。鎌倉、室町時代に至って大いに退歩したることも、やや欧州の中古に齊しく、元和以後、奎運隆々として興れること、また東西相比するに足る。而してわが上古の平安朝と近世の江戸時代とは、星霜相隔たること四百余年、中古の深谷を中にして、両端に聳えたる山の草木は、全く性質を異にす。中古のうち続きたる干戈擾乱は、社会に非常なる感化を与え、風俗習慣これが為に顯著なる変遷を経たり。従うてその前の文学と後なると種類同じからず、時には同一国民の手に成りたるものなりや否やを疑わしむるものありて存す。

江戸時代の下半期は最も明治のわれわれに近きもの、当時の社会を見し人は今に生存し、少壮者もまたその親兄より親しく当時の有様を聞けば、文化、文政の読本、草双紙などは、何等の障礙もなく明白に了解せらる。されどなお薄霞か陽炎の春の野に驟驟き燃ゆるこちして、些々たる時代の埒も直下の把玩に多少の妨害を与うるが如し。貧なる父母を助くとして、少女の苦界に身を沈むるが、果して孝行なりや、お家の宝物が失せたりとて、重代の功臣の家をも身をも失うは、何とて輕き命ぞ。文化、文政はなお甚だ近し、一步^{さかのぼ} 溯^{さかのぼ} って元禄の淨瑠璃、浮世草子を見れば、更に解し易からざるものあり。西鶴が